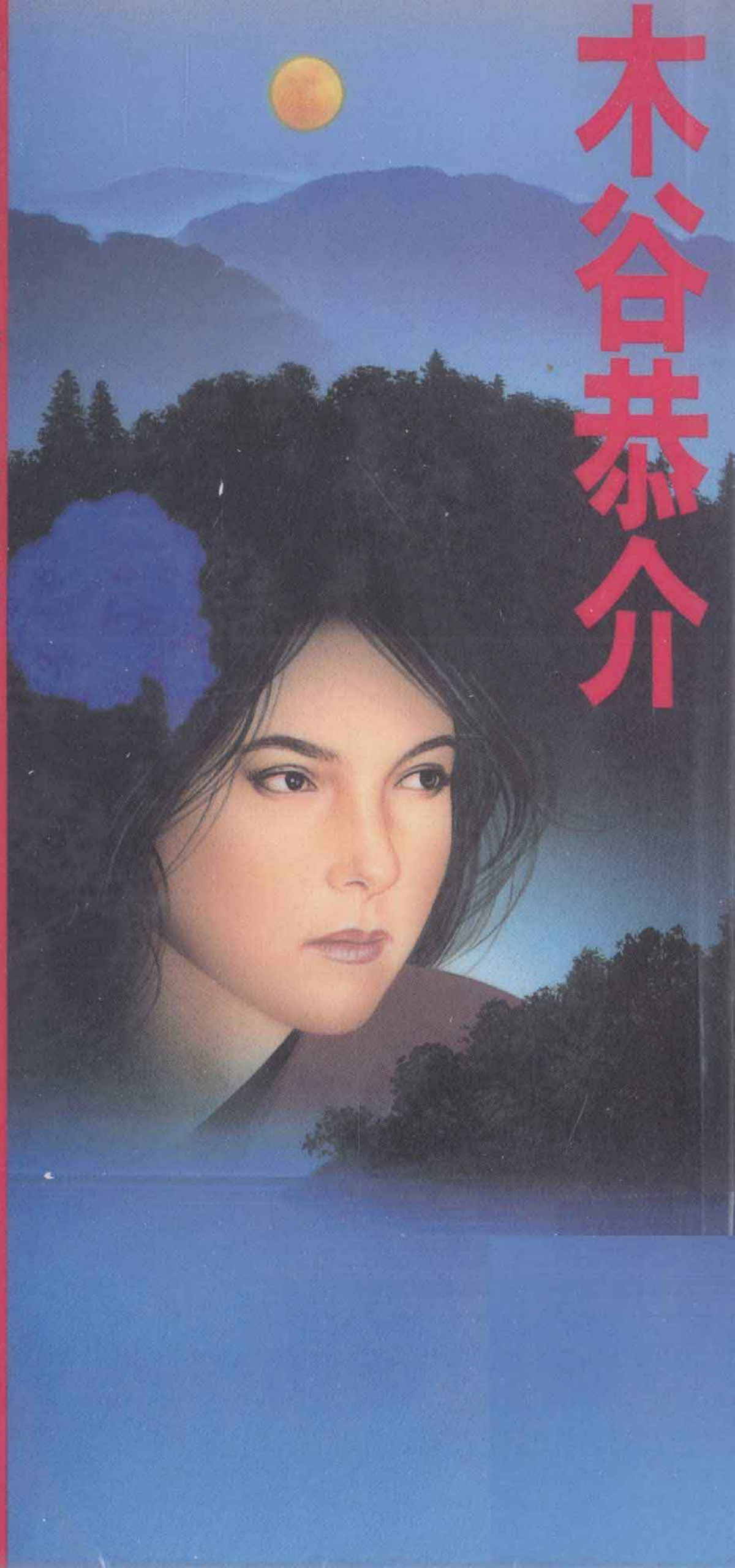


木谷恭介

TOKUMA NOVELS

書下し長篇旅情ミステリー

吉野十津川殺人事件





TOKUMA NOVELS

木谷恭介

吉野十津川殺人事件

発行者 徳間康快

発行所 徳間書店

東京都港区東新橋一ノノ一六 郵便番号一〇五-五五

電話三五七三・〇一一

振替〇〇一四〇・〇四四三九二

©Kyôsuke Kotani 1997 Printed in Japan

落丁・乱丁はおとりかえいたします

編集担当 今井鎮夫／販売担当 山田章治・益子 光

97K5b

ISBN4-19-850392-3

木谷恭介

吉野十津川殺人事件

OKUMA NOVELS

書下し長篇旅情ミステリー

図章



ISBN4-19-850392-3

C0293 ¥800E (0)

定価： 本体 800円 + 税

よしのとつかわさつじんじけん
吉野十津川殺人事件

こたにきょうすけ

木谷恭介

冷夏と予想された今年も、北海道や東北を除いて、やはり酷暑だった。それをものともせず木谷恭介は、本作品のために精力的に取材を重ねた。その成果があらわれて、まさしく「旅情ミステリー」の一級品に仕上がった。読めば誰しも十津川に出かけたくなるだろう。



TOKUMA NOVELS

書下し長篇旅情ミステリー

吉野十津川殺人事件

不谷恭介

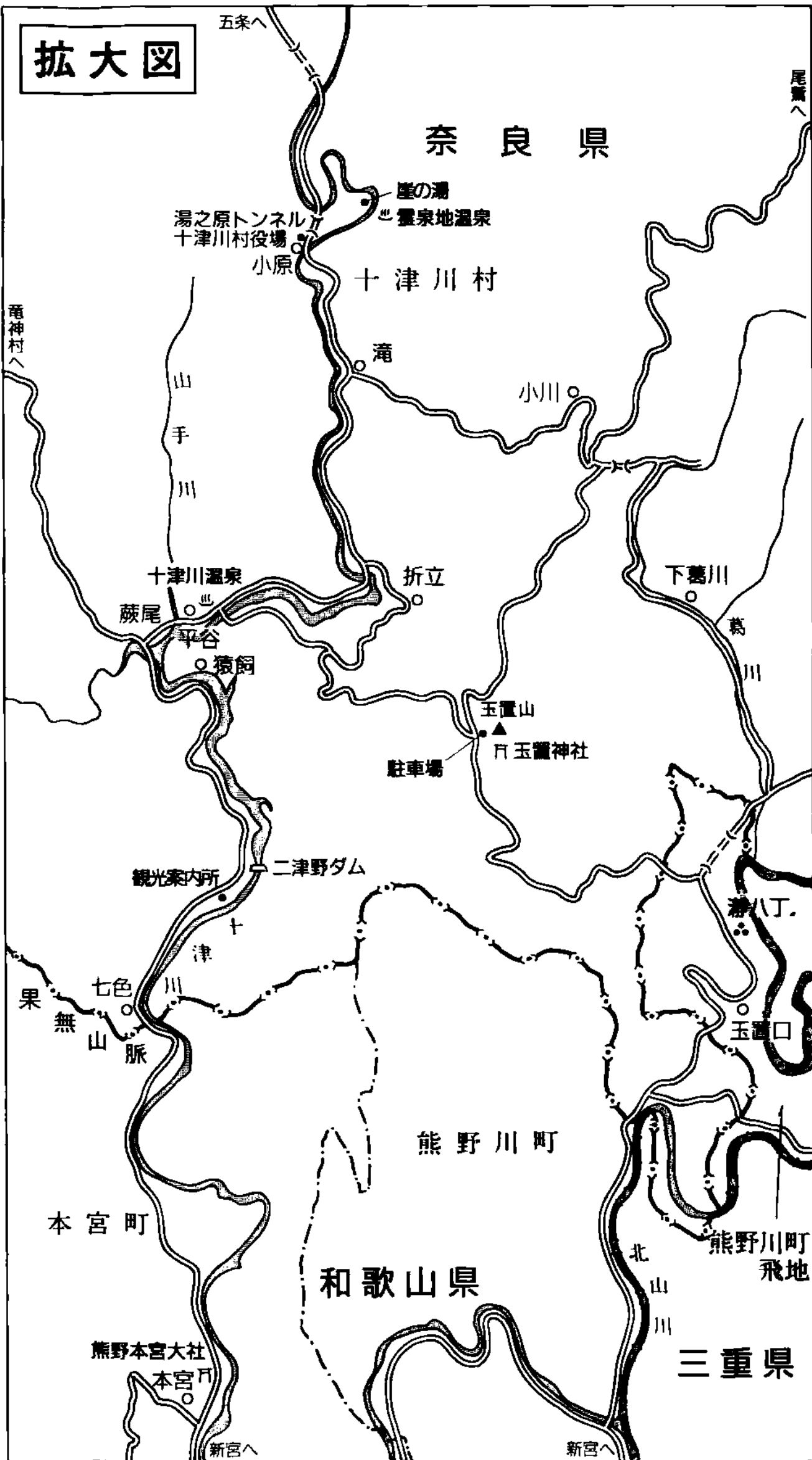


間書店

TOKUMA NOVELS

拡大図

奈良県

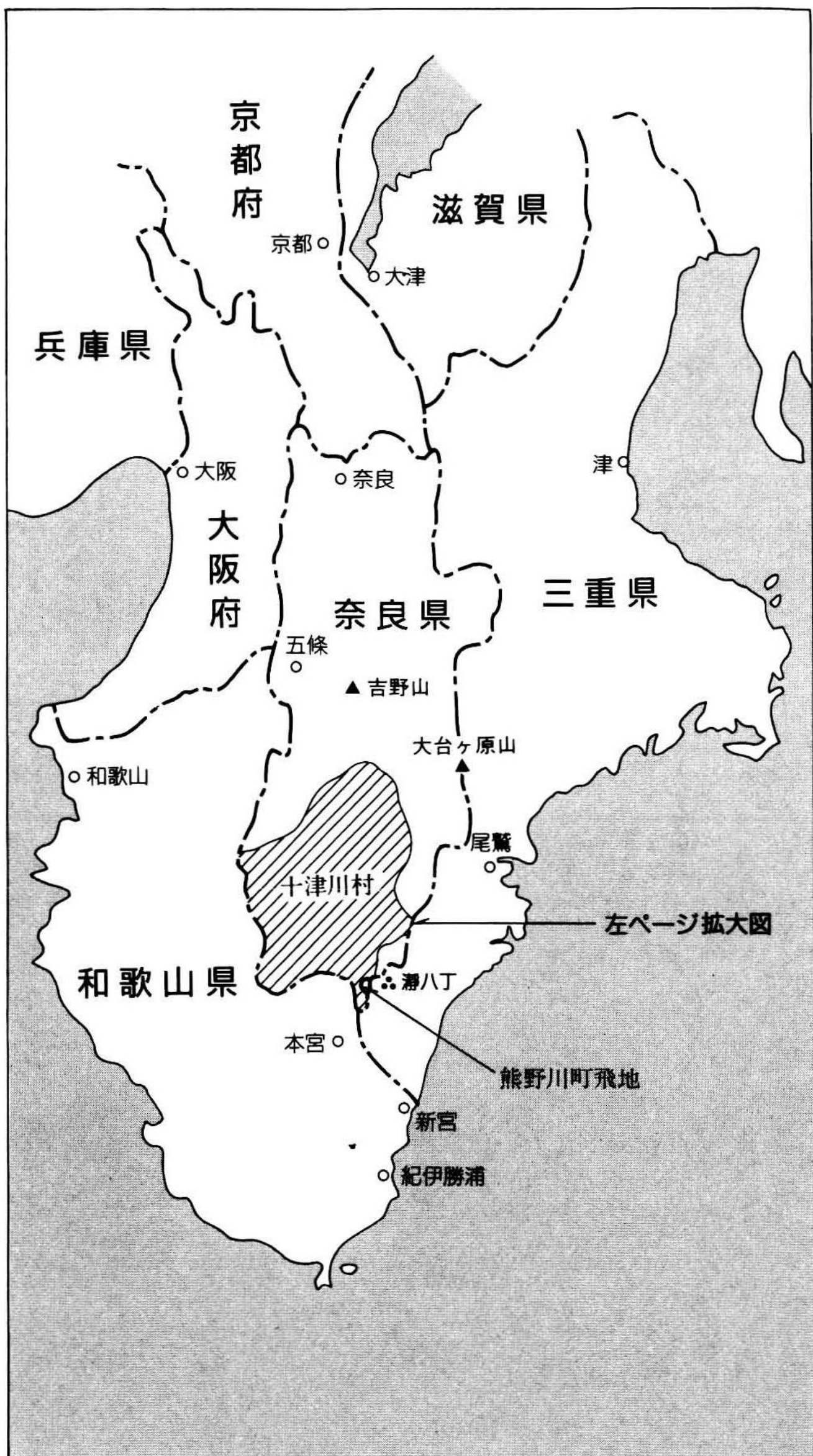


目次

第1章	霊泉地温泉・“獣の宿”を拒否した父
第2章	十津川温泉・湖底からでた仏像
第3章	玉置神社・ふたりめの犠牲者
第4章	新宮・大王地のクラブにいた女
第5章	尾鷲・父が訪ねていた居酒屋
第6章	南紀勝浦・美術館のあるホテル

あとがき

本文挿画・緒方ユージ



第1章 霊泉地温泉・“獣の宿”を拒否した父

1

母がめずらしく電話してきたのは、イタリア・ス
ペイン十二日間の旅の添乗を終え、半月ぶりに日本
へ帰ってきた日の夜であった。

「忍、^{しのぶ}元氣かい？」

母の道子^{みちこ}は弱々しい声でたずねた。

母の声を聞いたとき、日高^{ひだか}忍はこの夏も帰らなかつたことを咎^{とが}められるのだと思った。

東京の大学にはいつて、そのまま東京で働くよう
になって、もう十年ちかくなるが、郷里に帰ったの
は七年まえに、兄が交通事故で死んだときだけであ
った。

「ご免なさい。今年は帰ろうと思ったんだけど、忙
しくて……」

忍が先まわりして詫^わびるのへ、

「それはええんじやけど、お父さんが昨夜、でて行
ったまま帰ってこんのじや……」

母の道子は気がかりそうにいった。

「帰ってこないって？」

とつきには母のいつてることが飲み込めなかった。

父母は奈良県の十津川村^{とつかむ}で旅館を経営している。

十津川村は山また山の奥の村で、ひと晩帰ってこない、どこかへ泊まったことより、車の事故を起こしたのではないかと気づかう土地柄であった。

「はなぶき旅館の中河原^{なかがわら}さんに呼びだされて、カラオケスナックへ行きなさんじゃが、スナックをでたあと、どこへ行ったか分からんようになってしもうて……」

「スナックってどこの？」

「平谷^{ひらたに}に『夢ん中』というスナックがあるそうな。

昨夜の十一時ごろ、中河原さんとその店をでたのは確かなんじゃ。庵^{あん}の前橋^{まえはし}の脇に『姫沙羅^{ひめさらか}』というドライブインがあるうが……。お父さんはその駐車場に車をとめておったから、中河原さんは橋のたもとで別れたというてなさる。車はそのままになってお

った。どこへも行くわけがないんじゃが……」

母の道子は不安そうにいった。

「お父さんがカラオケなんかへ行くの？」

忍は不審に思いながらたずねた。

年齢は五十七歳だから、夜遊びにでたとしても不思議ではなかったが、父とカラオケが結びつかなかった。

カラオケに限らず、現代ふうなものを毛嫌いしている父であった。

「じゃから、中河原さんに誘いだされて、仕方なしに行ったんじゃ……」

母の道子はどう話してよいのか、声にとまどいを浮かべていた。

「車がそのままだったら、平谷のどこかにいるんじゃないの？」

忍は平谷の集落を思い浮かべながらいった。

十津川村は奈良県の五分の一を占めるおおきな村

だが、人口は五千三百人ほど。平地というのではないにひとしく、村を南北にながれる十津川沿いに集落が散らばっていて、そのなかでもっとも戸数のおおいの平谷であった。

あれで戸数は二百戸ほどだろうか。十津川をせきとめたダム湖に面していて、旅館が七軒と民宿が三軒あり、十津川温泉と呼んでいて、中河原勉三べんぞうの経営している『はなぶさ』もその一軒であった。

「中河原さんが心配して、立ち寄りそうな先は全部あたってくださった。どこにもいやあせん。わるいことがあったじゃないかと思えてきての」

「でも、車は無事なんでしょう？」

「そうじゃが……」

「だったら、心配すること、ないわよ」

父は五十七歳。車を運転してたのなら、事故ということもあるが、それ以外の事故は考えられなかった。

「じゃが、まる一日すぎても帰ってこん。こんなことは一度もなかったがね……」

母は不安そうに声をくぐもらせ、

「ちよつと帰ってきてくれんかね。孝男たかおがいりやあたよりになるが、わしひとりじゃから……」

懇願するようにいった。

「無理よ。今日、イタリアから帰ってきたとこなの。明日一日休みで明後日から、また、デンマークとスウェーデンへ行かなきゃならないんだから……」

忍はテーブルの上の一輪挿しへ目をやりながら、首を横に振った。

孝男というのは忍の兄だ。

五つ年上だったが、七年まえに自動車事故で死亡した。飲酒運転で崖がけから転落したのだ。

母ひとりでこころ細いのはわかるが、北欧三国十日間の旅の添乗を引き受けてしまっている。

「いつ帰ってくるんだい？」

「十五日。帰ってきたら、一度帰るわ」

「そうじゃね。お父さんはなんでもないよ。おまえがくるときは、ちゃんともどつてきとるよ」

母は気持ちを取りなおしたようにいい、

「気をつけて行っておいで」

と、電話を切った。

忍は一輪挿しの桔梗をみつめた。

桔梗の紫色が不吉に思えた。

父にもしものことがあったら、村へ帰って旅館を継がなければならぬのだろうか。

兄の事故死以来、胸のなかに引っかかっている宿題が、忍の胸を疼かせている。

東京での暮らしを知った忍にとって、十津川村は思い浮かべるだけで鬱陶しい存在であった。

東京からだとは新幹線で京都まで行き、近鉄に乗り換えて大和八木へ。さらにそこから特急バスで四時間。そのバスも最終が昼の十二時五十五分だから、

東京を朝の九時まえにでなければ間に合わないし、家に着くのが夕方の五時ちかくであった。

十津川の地名は、津（港）にとおいところ、または都にとおいことから遠津川、遠都川と呼ばれたのに始まるという。

しかも、とおいだけではなかった。

村のひとたちはことあるごとに、壬申の乱や南北朝時代、幕末明治維新など、歴史の重要な節目に十津川がおおきなはたらきをしたと誇るし、亡くなった作家の司馬遼太郎は、

『十津川は日本の歴史の中で、低地の政治に対し関心をもちつづけた唯一の山郷といえるし、さらには低地の権力に対し一種の独立を保ち得た唯一の山郷ともいえるのではないか』

と、評した。

それは歴史的な事実にはちがいないが、実際に村で暮らすとなると、忍は息がつまるのを感じた。

「独立を保ち得た唯一の山郷」は、村のひとたちにプライドを育てたが、それはいい替えると、古風な気質や頑固さとなってしみついた。

十津川村には頑固なひとがめずらしくない。

その村のなかでも父は輪をかけて頑固であった。

父は曾祖父の代から、平谷の十五キロほど上流の靈泉地温泉れいせんじで一軒宿『やど崖の湯』を営んでいた。

十津川峡谷の断崖の上に建っているから崖の湯。

自然発生的についたネーミングで、村でもっとも古い旅館だった。だからではないが、父はむかしからの旅館のしきたりをくずさなかった。

十津川をせきとめてダム湖ができ、平谷が十津川温泉と名乗るようになって、父はそれを認めなかった。

靈泉地から引き湯して、一キロほど下流に旅館や民宿が十軒ほどできたときも、靈泉地温泉と名乗ることに反対した。

靈泉地温泉は源泉をそのまま使っている『やど崖の湯』だけのものだというのだ。

父の本音は村にダムができ、国道が通じるようになって、村が急速に変わって行くことが気に入らなかったのだ。

それはともかく、父は旅館にとってかきいれどきの正月と盆を、『やど崖の湯』は休みと決めていた。

正月と盆は休むものだ。正月は親戚一統しんせきがあつまって年のはじめを祝い、盆は先祖の供養をする。それが人間の暮らしであり、正月や盆に旅行するひとたちは、人間であることを放棄している。

人間であることを放棄したひとたちを泊めるのは「獣の宿」だというのであった。

忍があとを継げば、父のいう「獣の宿」にするだろう。

正月は親戚一統があつまって年のはじめを祝うというが、十津川村のなかでも核家族化がすすみ、あ

つまってくる親戚がなくなっていた。

盆にしてもそうだ。

十津川村は明治の廃仏毀釈はいぶつきしやく以来、仏教とは縁を切った村だから、お盆らしい行事はおこなわず、墓まいりをするだけだったが、忍が高校にかよっていたころ、すでに墓まいりは父母と家族だけで営む淋さみしいものになっていた。

正月もお盆も、訪ねてきもしない親戚のために客室を空けておくことの不合理さが、忍には承服できなかったし、東京の生活になじむと、父の方針がアナクロニズムとしか思えなくなった。

忙しきにかこつけて、村へ帰ることを避けてきたが、それは父や村に対する反抗の姿勢だったのかも知れない。

いまの忍は村に帰って、旅館のあとを継ぐことなど、考えるだけで息苦しくなる。できることなら、このまま東京という都会で暮らしたいと願っている。

2

父が遺体で発見されたという知らせを、忍が受けたのはストックホルムでだった。

母の道子から知らせを受けた旅行会社が知らせてきた。

「お父さんは今月のはじめから行方不明だったんだって？」

旅行会社の主任はそうたずね、

「ええ……」

忍がこたえるのをまって、

「二津野ふたつのダムの猿飼さるかいというところで、お父さんの遺体が発見されたそうなんだ」

と、告げた。

「いつですか」

忍はとたんに胸の動悸どうきがたかなるのをおぼえなが

ら、たずね返した。

「発見されたのは今朝だそうだ。なんでも湖に浮かんでるのを土地のひとが発見して、警察にとどけたそうだ」

主任はそういい、

「そっちはいま何時かね」

と、たずねた。

「朝の七時ちよつとすぎですが……」

「日本はいま午後二時だ。ツアーは今日、そっちを發^たって帰国するんだったね」

主任は気づかわしそうな声で、

「お父さんの遺体は警察が解剖をするそうだから、家へもどるのがはやくて明日だ。明日がお通夜で、告別式は明後日以降になるんじゃないか。ツアーの成田着は明日の朝だったね」

と、確認するようにいった。

あと三時間ほどで北歐三国十日間の旅は終り、飛

行機でデンマークのコペンハーゲンへでて、成田行きに乗り継ぐ予定であった。

成田到着は明日朝の九時三十分だから、会社に報告を済ませ、その足で新幹線に乗れば、明日の夜は奈良県の五条市^{ごじょう}に泊まり、明後日の朝一番のバスに乗ることができる。

そのバスだと午前中に十津川村の実家に着くことが可能であった。

主任はツアーのスケジュールに支障がなさそうだと知ると、

「そういうことだ。わたしが知らせを受けたのは、それだけだから、くわしいことはお母さんに電話で聞きなさい。ま、とにかく、ツアーを無事、成田までもってきてください」

といって、電話を切った。

忍はフックを押すと、十津川の実家の電話ナンバーをたたいた。